

映画の復元

『何が彼女をそうさせたか』（1929）に関して ——（I）——

太田米男



ヴェネチアの眺望～彼方に天国の片隅サチーレがある

はじめに～ヴェネチア近くの天国の片隅

ヴェネチアから鉄道で1時間ほど行くと、サチーレという小さな田舎町に着く。イタリア北東部、オーストリアと旧ユーゴのスロヴェニア国境近くに位置している。このサチーレの町は運河によって開かれ発展した歴史を持ち、その風光明媚な景観によって、地元の人たちは“ヴェネチア近くの伝統的な天国の片隅”と呼んでいる。

紅葉には少し早いですが、小春日和に恵まれた天国の片隅サチーレの10月は、白い建物と水面に映った緑が映えて美しく、観光には最適のシーズンと言えた。

しかし、今回この町を訪れたのは、サイレント映画を専門に上映する“ポルデノーネ無声映画祭（Le Giornate Del

Cinema Muto）”に参加するためであった。私が復元に携わった映画『何が彼女をそうさせたか』を急ぎよ上映してくれることになったからだ。

映画祭の期間中の1999年の10月9日から16日までの8日間、朝の9時から深夜の12時まで、昼と夜の二度の食事時間を除き、暗い劇場のスクリーンにぶっ続けでサイレント映画が上映される。『何が彼女をそうさせたか』の上映準備もさることながら、映画祭の期間中はモノクロームだけの世界に身を委ねることになる。それは観光どころではなかった。

ポルデノーネ無声映画祭は、その名の通り、毎年ポルデノーネという町で開催されている。しかし、今年には上映会場である町の映画館が老朽化して改修するために、隣町サチーレ

のテアトル・ザンカーナロとテアトル・ルツソという二つの劇場で行なわれることになっていた。世界から集まる映画研究者たちで小さな町の人口は膨れ上がり、ホテルやレストランの確保が大変で、我々もポルデノーネの町からサチーレへ通うことになる。

京都大学の加藤幹郎氏と私は、イタリア語の通訳をして下さったボローニア大学に留学中の石田美紀さんと、ヴェネチアで合流し、サチーレに乗り込んだ。

無声映画時代の日本映画の傑作『何が彼女をそうさせたか』の復元版が、世界の映画専門家たちが集まる国際的な舞台上で上映される。それは晴れがましくも復元の成果が試される場であり、また日本映画のサイレント期のまぼろしの傑作を世界に知らしめるという責務を持って、まさに乗り込むと行った形容が相応しいくらいの意気込みで、私たちはサチーレへと向かって行った。

ポルデノーネ無声映画祭

イタリアで開催される《ポルデノーネ無声映画祭》は日本ではまだまだ知られていない。映画祭といえば、カンヌやヴェネチアのようにスターたちが集う華やかな国際映画祭を思い描くが、1930年代までの無声映画を専門に上映するという性格上、少し趣の違ったカルト的な雰囲気を持った映画祭であった。

アメリカのジョージ・イーストマン・ハウスをはじめ、イギリス、フランスの映画博物館やフィルム・アーカイヴ、各大学の映画研究者たちが集まり、当初は映画情報を交換するシネマテークとして始まった。

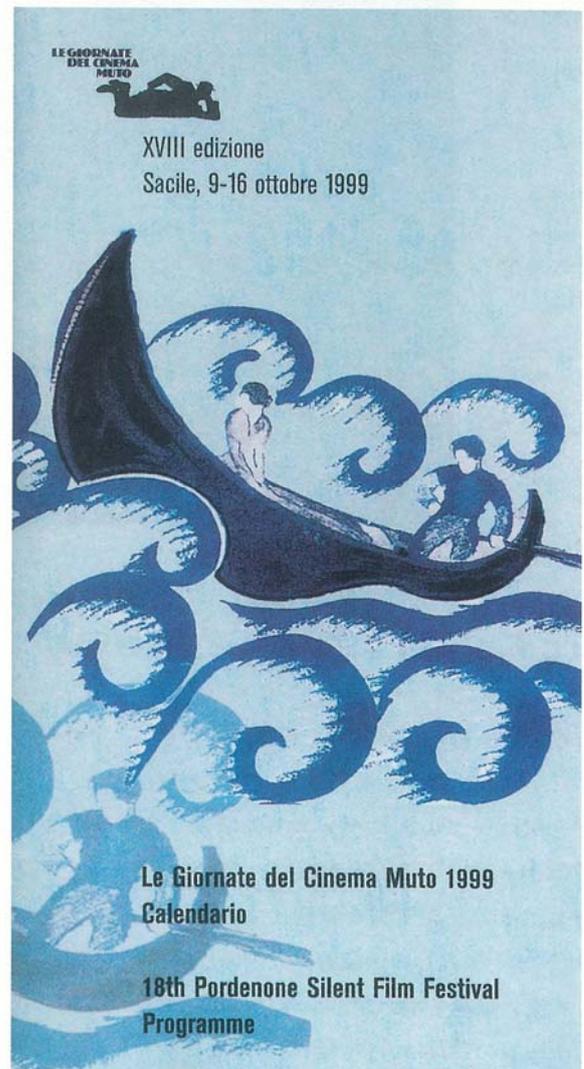
世界の映画を研究する人たちにとって、それはまたとない貴重な機会であり、年に一度世界各国の映画研究者たちが集う交流の場として、回を重ねる度に盛大になり今回で18回目を迎えた。今では、世界でも屈指のサイレント映画祭として高く評価されるまでになっている。

100年の歴史を持つ映画は、35mmフィルムという膨大な量の財産を持っている。名作、傑作、また貴重な映像も含め、人類の文化財産として如何に次代に伝えて行くか。マルチメディアの発達により映像情報を伝える媒体がますます広がる中、映画祭が新作映画だけでなく、過去の映画も、フィル

ム・アーカイヴ間の映画マーケットや見本市的な役割を持つようになってきたことを、このポルデノーネ無声映画祭は教えてくれた。



ザンカーナロ劇場



ポルデノーネ無声映画祭公式プログラム（表紙）

今年の映画祭のテーマは、北欧映画の特集を中心に、幾つかの部門に別れ、豊富なプログラムが組まれている。メインイベントとしては、フィンランドのアキ・カウリスマキ監督の20世紀最後のサイレント映画という触込みで『白い花びら (Juha)』を上映。日本では紹介されることのないヒッチコックのサイレント映画や助手時代の映画群、D・W・グリフィス部門では、ここ数年続いているプロジェクトとして、今年は1909年に限定した全作品の上映。そして日本映画の『何が彼女をそうさせたか』は、“再発見と復元”部門で、《まぼろしの日本映画のマスターピース (傑作)》として紹介されていた。

上映は、すべてピアノ伴奏つきで、『何が彼女をそうさせたか』の場合は、京都での初演から東京国際映画祭の特別招待上映に至るまで、この映画にオーケストラ・スコアのオリジナル音楽をつけてくれたドイツの音楽家ギンター・A・ブーフヴァルト氏が伴奏してくれる。彼もまた、ミュンヘン、ライプチヒ、フライブルグの他、スウェーデンのストックホルムで開催されたヨーロッパ芸術首都祭でも、この映画を上映し、演奏活動を行なっている。今回のポルデノーネでも気持ち良く引き受けてくれた。ただ、費用の関係で、この映画祭ではオーケストラではなく、ピアノ伴奏での上映となった。

彼の演奏法は、ピアノ伴奏を主体にしたアドリブ演奏で、時々ヴァイオリンを響かせながらピアノを弾く。その特殊な演奏法のため、サイレント映画の上映が盛んなヨーロッパでも異彩を放っている。



天国の片隅サチーレ

ブーフヴァルトさんの協力が得られたこともあり、評判の高いポルデノーネの無声映画祭で、『何が彼女をそうさせたか』を上映できたことは、幸運以外のなにものでもない。外国語の一つもできない私が、日本から遠く離れたイタリアでの映画の祭典に参加できたのは、偶然の出会いと多くの人たちの援助の積み重ねによる。これは、取りも直さず、映画『何が彼女をそうさせたか』が歴史的な傑作であるという証しでもあった。

会場には、前回の京都映画祭にも参加してくれた著名な映画研究者であるアメリカ・ウィスコンシン大学のデビッド・ボードウエル氏や、旧知のロチェスター大学のジョアン・バーナディさんも参加しており、彼らの尽力によって、映画『何が彼女をそうさせたか』の上映が実現できたことも付記しておかなければならない。

このポルデノーネ無声映画祭が、如何にマニアックな人々が集まり、趣の違った雰囲気を持った映画祭であるかは、今回の例ではなかったが、ジョアン・バーナディさんから教えられた次のエピソードをお聞きになれば、およその推察が出来ると思う。例えば、復元作品が上映され、質疑の場などで「誰か、この欠けた箇所を持っておられますか？」と尋ねれば、会場の何処かから手が挙がると言ったことも良くあるという。

古典的な映画は、フィルム・センターなどの公的な施設だけでなく、個人のコレクターが所有している場合も多く、私費で映画博物館を経営できるほどの、富豪の映画コレクターも参加しているという。

この映画祭の目的も、シネマテークとしての映画上映だけでなく、『何が彼女をそうさせたか』が上映される“再発見と復元”部門のように、映画の修復や復元の成果発表が重要な目的の一つになっている。

映画『何が彼女をそうさせたか』の復元に携わるという幸運に恵まれた私にとって、京都映画祭、東京国際映画祭での特別上映、さらにこのポルデノーネ無声映画祭での上映は、この映画との出会いから復元、発表までの一連の経緯の中の一つの目的の達成を意味していた。

上映が終わり、ピアノ伴奏のブーフヴァルト氏への喝采と共に、白髪の初老の紳士が駆け寄り、私に握手を求めてきた。言葉は分からなくても、感激の表現であることは解る。盛ん

に体を動かし、感動を伝えようとしている。名刺を受け取り、良く見ると、ロシアのゴス・フィルムフォンドの人だった。

数年前、映画『何が彼女をそうさせたか』のすべての物語は、ロシアのフィルム貯蔵庫である国立ゴス・フィルムフォンドでのフィルムの発見に始まった。幾人もの人たちの不思議な出会いと意外な経緯を辿った映画『何が彼女をそうさせたか』は、このロシアの紳士にとっても、また別の歴史を形作っていたのかもしれない。

復元に関する考察に入る前に、まずこの映画の製作から再発見されるまでの経緯を辿っておく。

何が彼女をそうさせたか

映画『何が彼女をそうさせたか』は、公開当時の混沌とした世相を反映して大変な話題となった。翻訳風なネーミングも洋画のような斬新でモダンな印象を与えたのだろう、人々の心を掴んだ。社会現象になる程のセンセーションを巻き起こし、映画は空前の大ヒット。昭和初頭の世相の一面を形成するほどに一世を風靡し、題名は流行語にもなったと、伝説のように語られてきた。

映画『何が彼女をそうさせたか』が公開されたのは、昭和5年(1930年)。今から70年前である。公開当時に見た人は、今や80歳半ば以上の人。それもチャンバラ映画や娯楽映画ではなく、シリアスな女性映画に関心を持っていた人たちである。だから、公開当時に《傾向映画》の傑作として熱狂的に支持された状況を肌で感じ、記憶している人はほんの限られた人たちで、内容まで記憶している人は皆無に等しいのではないだろうか。

昭和初頭は、日本映画の第一次黄金期にあたる。無声映画の成熟期。名立たる名作群が量産されたなかにあって、『何が彼女をそうさせたか』は興行的に大成功を収めただけでなく、内容的にも、キネマ旬報でベスト映画第1位に選ばれるほどの高い評価を得ている。

岩崎昶は、「映画史」(日本現代史体系)の中で、この映画『何が彼女をそうさせたか』に触れている。

「現代もの傾向映画として最大の問題をまき起こし、記録的な成績をあげたのは『何が彼女をそうさせたか』(帝キネ)であった。プロレタリア作家藤森成吉の戯曲によって、鈴木

重吉がシナリオと監督とを受けもったこの映画は、孤児院に育った一少女(高津慶子)が、冷酷な世間の荒波にもてあそばされ、しいたげられ、最後には放火犯としてひかれていくまでの幾変転を扱っているがその間に、富豪、宗教、慈善事業の仮面をあばき、犯罪者は「彼女」ではなく、彼女をそうさせた社会の矛盾と残忍さそのものであることをするどく弾効している。一種の新派悲劇的通俗性が、この映画を大ヒットにした一因であるが、同時に、この時代の民衆の階級意識のめざめ、社会的不満が、この映画にかっこうなはけ口を見いだした…」と記している⁽¹⁾。

民衆の階級意識のめざめと社会的不満、その背景となった時代とは、どのような時代だったのか。

昭和初頭という時代は、大正デモクラシー後の自由主義的な思潮の流れを受け、政治的にも文化的にも大衆運動の高揚する時代であった。新聞やレコードなど大量生産によるマスメディアの技術革新が、大衆文芸や流行歌の勃興を促し、モダニズムの時代を形成していた。モダン・ガールやモダン・ボーイの略称であるモガやモボが現われたのも、この時期である。

一方、政治面では、ロシア革命後のプロレタリア思想が一般に浸透する時期で、左翼主義的な思潮が斬新に映り、学生たちの中にも“マルクス・レーニン主義”がファッションのように持て囃され、マスコミも彼らをマルクス・ボーイと呼び、新しい時代の到来を印象づけていた。

昭和3年(1928)には、待望された日本で最初の普通選挙、第1回衆議院議員総選挙が行なわれ、幾多の無産政党を初登場させた。大正デモクラシー以降の風潮である「自由に主張できる時代」との錯覚が生まれるほどに、大衆運動が高揚していた。

しかし、経済面で言うと、関東大震災後の慢性的な経済不況の真っ只中にあり、それに追い打ちをかけるように世界的な大恐慌の時代と重なる。相次ぐ銀行の倒産や米価の暴落、失業者の氾濫、ストライキの続発など、社会不安は極限に達する。自由さを覚えた民衆の不満は、その行き場を求めて、今にも爆発寸前の状態にあったと言える。

倶楽部以下8つの映画館と、芦辺劇場以下6つの劇場、そして大阪市外の小坂と兵庫の芦屋に映画スタジオを所有し、700本以上の映画を量産した。昭和4年(1929年)には、近鉄沿線の長瀬に東洋一を誇り《東洋のハリウッド》と豪語した大撮影所を建設、隆盛を誇っていた。

しかし今日、その《帝キネ》の会社も《東洋のハリウッド》と呼ばれた撮影所も存在していない。そこで製作された膨大な量の映画と共に、帝キネもまた消滅し、まぼろしの映画会社になっていた。

このまぼろしの映画会社、帝国キネマ演芸株式会社の歴史を簡単に触れておく。

日本映画の草創期にあたる明治の時代は、京都の横田商会と東京の吉沢商会、福宝堂、M・パテーの4社が競い合っていた。映画がはじめて日本に紹介されて以来、巡業隊を組織しての興行形態から専用の映画館ができ、またスタジオとは名ばかりであっても撮影施設が建設され、製作に上映に揺籃の時代が続いていた。

その明治の時代が終わり、大正元年(1912年)、前述した4社が合併して、大トラストの日活(日本活動写真株式会社)が誕生する。この日活が、善しにつけ悪しきにつ



帝キネ創始者 山川吉太郎

けて、以降の日本映画の中心的な役割を担うことになる。

日活は、合併後間なしに内部の勢力争いが表面化し、旧吉沢派の脱退や小林喜三郎をはじめ旧福宝堂派の独立を招く。

福宝堂の大阪支店長をしていた山川吉太郎も、小林の退社後、芦辺倶楽部の山松友次郎と共同で東洋商会をおこし、日活を退社。東京で常磐商会を旗揚げしていた小林の呼び掛けに応じ、イギリスのアーバン会社の天然色映画の独占権を得て、大正3年(1914年)に天然色活動写真株式会社(通称

天活)の設立に参加する。

天活は、東京を本社に、支店を大阪におき、ロンドンにも出張所をおいた。山川は大阪を仕切ることになる。

小林喜三郎は、独立した《小林商会》をもって連鎖劇などを製作、天活に配給した。山川も同様の形態で天活と距離をおき、独自で小坂に撮影所を建設、地場を固めた。一時、小林商会の方は頓挫したが、小林喜三郎はアメリカ映画『イントレランス』(D. W. グリフィス)の配給で大成功を治め、大正8年(1919年)に国活(国際活映株式会社)を設立し、天活を吸収して日活に対抗しようとした。その際、関西を仕切り、製作と配給、興行を行っていた山川にも呼び掛けたが、山川はすでに映画館や撮影所を所有していたこともあり、国活には合流せず、独自に資金を集め、《山川演劇商行》をおこした。やがて北浜株式界の有力者であった松井伊助を社長に迎え、自ら専務となって、《帝国キネマ演芸株式会社》を創設。大正9年のことであった⁽²⁾。



帝キネ長瀬撮影所の全景

この頃が、日本映画の再編の時期にあたる。帰山教正(天活)が提唱した《純映画運動》が広がり、活動写真から映画へ名称も改め、映画産業の近代化と内容の充実、女形を廃止して女優の起用、和楽を廃め洋楽の伴奏を行なう、セリフ字幕を採用することで活動弁士の横行を規制するなど、映画の内容においても近代化が進められる時期でもあった。映画会社も国活、帝キネのほか、松竹キネマ合名会社や大正活映株式会社も創設され、撮影施設も充実してくる。

帝キネが操業をはじめた矢先、今太閤と呼ばれた松井が病没。その後を山川吉太郎が社長に昇格、経営に才腕を揮うことになる。

山川の帝キネは、市川百々之助のチャンバラ映画や通俗的

なメロドラマを量産。娯楽に徹した映画会社として幅広い人気があった。関東大震災で無傷だった帝キネは他社が製作減退している隙にも乗じて製作活動を拡大する。そのつけが廻ったのか、一時は総会屋立石駒吉の付け入る隙を作り、スター引抜きなど横暴な経営ぶりで、存続の危機もあった。しかし、それも平穩に乗り越え、撮影所も小坂と芦屋の他に、昭和4年には近鉄沿線の長瀬に大撮影所を建設。破竹の勢いで、トーキーへの素地を固めているかに見えた。

その矢先、昭和5年9月30日の夜半に、不審火と思われる火災にあい、東洋一を誇った撮影所は焼失した。映画『何が彼女をそうさせたか』が公開されて、わずか半年ほど後のことだった。

この撮影所の建設と運営の資金難で松竹資本の参入を仰いでいたために、山川はすでに専務に勇退して、首脳は松竹陣で固められていた。これに長瀬撮影所の火災が追い打ちをかけることになる。

華やかなスターたちに囲まれ、隆盛を誇り、700本以上もの映画を量産し、波乱に富んだ山川の帝キネは、東洋のハリウッドと共に露と消えた。焼け跡に立ち、山川は一つの時代の終焉を感じたのだろう。山川には、すでに大阪や映画に固執するだけの情熱も力も失せていた。

撮影所の機能を、松竹傘下になっていた京都太秦の旧阪妻プロの跡地（現・東映京都撮影所）に移された。映画『何が彼女をそうさせたか』が大ヒットしたにも関わらず、焼け石に水で、白井松次郎社長も辞意をもらすほど経営的に破綻。帝国キネマの名はここに消滅することになる。その代行会社として《新興キネマ株式会社》が誕生する。

山川吉太郎は、永年の功で、新興キネマの常務に迎えられたが、再び風雲を巻き起こすだけの覇気はすでになくしていた。

余談になるが、昭和17年の軍事統制で、新興キネマも日活、大都と統合され、大日本映画株式会社（大映）となって、その名は消滅する。

東洋一《東洋のハリウッド》と呼ばれ、隆盛を誇った帝キネも、すでに夢のあと、撮影所もまた《まぼろしのスタジオ》として消えて行く運命にあった。

フィルムの帝国、ロシアへの旅

帝国キネマ演芸株式会社の創始者、山川吉太郎の孫にあたる山川暉雄は、現在、大阪十三で総合レジャーの会社サンボード株式会社を経営している。アップル・シアターや第七芸術劇場の名で親生まれ、大阪ミナミのアメリカ村にあるパラダイス・シネマの経営者でもある*。また自主製作ではあったが、映画『あーす』（金秀吉）にも資金援助を行なっている。映画製作からは撤退したものの映画館経営は続け帝キネの流れをつなげてきた。

「ボクは映画館の子。物心ついた時から祖母や母から華やかな映画界の話聞いて育った。いつか祖父の映画を自分の劇場で上映したい」と、常々思ってきた。

山川暉雄は、祖父の創った幻の映画群に触れてみたいと、永年探し続けていた。写真や資料を集めて《帝キネ展》を開くことは、憧れであった祖父との心の出会いであり、映画興行を原点としてきた山川にとっては、初心である映画への愛と夢を持続させる熱情でもあった。

それは取りも直さず家系の歴史、ルーツをめぐる自分探しの旅でもあった。

多忙な仕事の合間を縫って、東京の国立近代美術館フィルム・センターや京都の文化博物館を訪ね、映画の専門家やコレクターにも尋ねて廻ったが、スナップやスチール写真はあっても、映画フィルムは1本の作品すら発見出来なかった。

まさか1作もないという信じ難い思いと、祖父の映画に触れてみたいという思いは、ますます募り、傑作であっただけに、特に『何が彼女をそうさせたか』だけは、必ず見付けると、執念にも似た気持ちを持って探すようになっていった。

戦時中に、旧満州（中国北東部）の満映（満州映画協会）の試写室で、『籠の鳥』と『何が彼女をそうさせたか』を見たという人の話を聞きつけ、中国に渡っていないかと、国内だけではなく、海外にも目を向けるようになった。

中国かロシアには必ずある。そう思い込むと確信に似た気持ちになってきた。政治や思想的な国交の断絶で、長く交流を持たなかった国々だが、映画『何が彼女をそうさせたか』は社会主義的な映画であり、軍国日本への恨みや思想面での排斥はない。また、映画に対しての芸術的な認識も理解も深く、日本よりも遙かに映画を大切にしている。まずは日本よ

りも現存している可能性が高い。

特に、終戦直後、満映で作られた映画のほとんどがソビエト軍が接收していったという噂もある。

幸運にも、ソビエト連邦の崩壊と新生ロシアの誕生が山川暉雄には祖父の映画が自分を呼び寄せているように感じられた。

知人からロシア副領事の A. V. ソンツェフ氏を紹介してもらい、調べて貰うことにした。また、その方面に詳しい知人を通して、フィルム・アーカイブなどの関連施設を調べて貰った。

その結果、『何が彼女をそうさせたか』らしいフィルムがロシアに存在することが分かってきたが、具体的には何処にあるかまでは分からなかった。

半世紀を遥かに超え、消滅した《帝キネ》の栄光がもうすぐ蘇る。永年の思いである祖父との心の出会いが、目前に迫っていることを確信できた。

平成4年(1992年)になって、ロシア領事館で開催される『おろしや国酔夢譚』(佐藤純彌)の試写会とパーティの協力依頼があり、山川暉雄は全面的に協力することになる。その縁からソンツェフ副領事が、お礼にと本国の上司に再度問い合わせてくれた。翻訳された内容やスチール写真などと照らし合わせた結果、モスクワの国立ゴス・フィルモフォンドにあるフィルムが、『何が彼女をそうさせたか』にほぼ間違いはないとの確認がとれた。

山川暉雄の知人で、日ロの経済交流誌《ウートロ(明日)》を発行している設計事務所を経営の福永人士氏がゴス・フィルモフォンドに山川の代理として出向き、そのフィルムの確認と購入の交渉にあたった。



ゴス・フィルモフォンドでの山川暉雄

これまで、国家間や放送局などの公的機関とのフィルムの交換や取引は行なわれているが、個人への売買は前例がなかった。山川にとって幸運だったのは、ロシアがエリツィンの時代になり、資本主義への政情の変化にあった。ゴス・フィルモフォンドもペレストロイカ以降、独立採算制をとる必要に迫られていたことが、結果的に譲渡に働いたと考えられる。

山川の無理を承知で「プリントで良いから、譲って欲しい」の申し出に、前例がないという理由で交渉が難航したものの、山川の情熱がマリシェフ所長を動かすことになる。「ヤマカワはこの映画を製作した帝国キネマのお孫さんでしょう」と最終的には映画製作者の血族ということで快諾されることになった。

日本で銀行振込みを済ませ、福永氏と山川はロシアへ向かった。

ソビエト連邦の崩壊と新生ロシアの誕生。その混乱は不安な情勢を孕んでいた。山川たちが、モスクワの地に降り立ち、目にする光景は、軍人たちに交じって、ロシアン・マフィアと思わしき怪しい男たちや街娯らしい女たちの目立つことだった。それは、そのまま新生ロシアの混沌とした政情を物語っているかに見えた。

モスクワから60kmほど南方に、その広大な土地を有したフィルム貯蔵庫、ゴス・フィルモフォンドがあった。

ウラジミール・マリシェフ所長の出迎えを受け、5万5千タイトルの映画を保管しているという施設は、一つの広大な田舎町を思わせた。その膨大な作品群の中から1本のプリントを受け取った。



有名な場面のカットの写真しか見ていないだけに、山川には、そのフィルムが本当に『何が彼女をそうさせたか』のフィルムなのか全く分からなかった。それも冒頭とラストがないという。

騙されているのかも知れないという半信半疑の思いではあっても、抗議すれば断られかねない。冒頭とラストの欠落部分は継続して探して頂くと言うことで、35mmのフィルム缶をダンボールに詰めた状態で、手荷物として持ち帰ることになった。

ロシアが民主的になったとはいえ、フィルムを国外へ持ち

出すことは、なかなか許可が得られず、大変難しいと聞いていた。マリシェフ所長からの許可書を持っているとは言っても、モスクワの空港税関で足止めを受け、フィルムのチェックを強要されて危うく拘束されかけた時は、危機一髪の思いだったという。

1993年8月のことだった。

日本映画の百年

「今では笑い話になるが」と山川暉雄は回想する。

山川は、ロシアから持ち帰ったフィルムについて、10ヶ月あまりの間、一切口外しなかった。

また、新聞をみれば、新生ロシアの記事が溢れるなかゴス・フィルモfondやマリシェフ所長の名が出ていないかと活字を探るのが日課のようにになっていた。

日本映画であり、祖父の作った映画であっても、国有財産であるフィルムをロシアの国外へ持ち出すことは許されない。もしかして、マリシェフ所長は不正に映画を譲渡したのではないか。もしかして、不正が見つかり逮捕されたのではないか。

山川は、モスクワでのマフィアの横行や空港税関でのやり取りが甦る度に、ゴス・フィルモfondでの出来事があまりにもすんなりと運んだことが不思議に思え、夢の中での出来事か、もしくは映画の一場面のような錯覚すら覚えるようになっていた。

急速に民営化するロシアの法人が、国からの援助を断たれ、存続のためには営利に走っても不思議ではない。しかし、個人に売却することは、異例中の異例だった。

時間が過ぎるほどに、山川は公表する時期を逸してしまったと思うようになって行った。

ロシアから決死の思いで持ち帰った筈の『何が彼女をそうさせたか』を誰に見せるのか。所詮、音もなく、冒頭もラストもない。この映画に、それほどの価値があるのだろうか…。

もしかしたら、山川は一人の映画コレクターとして、『何が彼女をそうさせたか』を一切表に出さなかったかもしれない…。イギリスのBFI（ブリティッシュ・フィルム・インスティテュート）が、『世界の映画百年』の企画を立て、『日本映画の百年』の監督として大島渚に依頼しなければ…。

BFI が、1995 年の映画生誕百年の記念事業として、各国の映画人に、その国の映画史のドキュメンタリー製作を依頼した。12、3 カ国の映画史を集め、シリーズものとしてテレビ放映しようという試みであった。例えば、イギリスはステイブン・フリーヤーズ、アメリカはマーチン・スコセッシ、フランスはジャン＝リュック・ゴダール、イタリアはベルナルド・ベルトリッチ、そして『日本映画の百年』は大島渚に依頼された。

大島渚のシナリオは、日本映画のそれぞれの時代を代表する映画の場面とスチールを並べて、ナレーションで解説してゆくオーソドックスな手法を採った。

その冒頭は、近年に発見された『忠次旅日記』（伊藤大輔）の映像で始まり、映画の輸入から日本映画の父と呼ばれた牧野省三の映画、続いて無声映画の傑作群が並ぶ。昭和の時代に入り、『生ける人形』（内田吐夢）、『都会交響楽』（溝口健二）、そして『何が彼女をそうさせたか』（鈴木重吉）…。

ナレーションでは、「…《傾向映画》の時代が来る。それは経済の悪化、労働運動、農民運動の激化、それに対する激しい弾圧の中で、資本主義社会の矛盾と冷酷をあばこうとしたものだった。…」^③

しかし、傾向映画のフィルムが1本もない。東京のフィルム・センターにも、京都の文化博物館にもない。川喜多映画記念財団にもなかった。何人もの映画研究者にもあたったが見付けることができなかった。大島は、このような名作は必ず何処かにある筈だと信じ、製作の期間中、最後まで探すことをあきらめなかった。結局、製作期間が迫り、映像を取り入れることは断念せざるを得なかったが…。

この映画を製作した帝国キネマはすでにない。しかしその末裔は何処かにいる筈だ。帝キネは、新興キネマになり、大映になった。この大映も30年前に一度倒産している。しかし、もしかしたら映画界の生き字引でもある最後の旧・大映京都の撮影所長、鈴木晰也氏に尋ねれば、その消息がつかめるかも知れない。

大島が、鈴木に問い合せると、山川を紹介しようということになった。

実は、山川暉雄と鈴木晰也は懇意の仲だった。山川経営の映画館は旧・大映の専門館だったこともある。何より山川夫婦の仲人が鈴木晰也氏であった。

鈴木晰也の山川への久しぶりの音信は、もちろん映画『何が彼女をそうさせたか』の行方だった。「帝キネの末裔だから、その映画が何処にあるか、知っているだろう。教えろ」というのが鈴木の出発点だった。

山川は、見透かされているような思いで、鈴木の話の聞いたが、奇遇と言えれば良いのかも知れない。恐る恐るロシアでの話をすると、鈴木は「何を言ってる。これは歴史的な事件なんだぞ」と叱咤した。

早速、大島渚と会うことになり、キネマ旬報では大島と鈴木木の対談という特集まで組まれることになった^④。

これが新聞にも採り上げられる切っ掛けとなり、これを機にして東京と大阪で披露試写会を開くことにした。

新聞やマスコミのあまりの反響の速さと大きさに、山川は目を見張った。その反響の大きさによって、山川暉雄は改めて、映画『何が彼女をそうさせたか』の偉大さと名声を知ることになった。

暗闇に浮んだまぼろしの映像

披露試写は、1994年7月5日、評論家や映画関係者を招いて、IMAGICAの東京映像センターで行なわれた。山川は、お礼を兼ねてロシアからゴス・フィルムフォンドのマリシェフ所長とウラジミール・ドミトリフ副所長を招待し、伝説の映画を60数年ぶりに復活された。

暗闇の中、スクリーンに映し出された映像は、モノクロームでサイレントだった。咳払いが会場に反響しそうな息詰まる沈黙の中で、まぼろしの映像が浮び上がり、『何が彼女をそうさせたか』は全貌を現した。

しかし、その場に立ち合った人々のどれだけが、この映画の真の価値を理解出来たのだろうか。その映像には冒頭とラストがなく、字幕はロシア語であった。

山川暉雄には、その映像が完全ではなくても、永年の念願であった祖父との出会いの感動の方が大きかった。

スクリーンに浮ぶ少女すみ子の憂いのある表情が、画面いっぱい迫ってくる。

「動いている！」「生きている！」

山川は、鮮明で、力強い映像を見ながら、到頭憧れの祖父と会えた気がした。

沈黙と息詰まる異常な緊迫感の中で、感無量の思いでスクリーンに釘付けられていたのは、山川暉雄一人ではなかった。この映画の監督、鈴木重吉夫人の操さんと次女の志村あき子も、その映像を見つめていた。…

映画監督鈴木重吉は、今日では忘れられた存在になっている。鈴木は、この『何が彼女をそうさせたか』で一躍トップ・クラスの監督の仲間入りをし、ニューヨークに本部を持つ世界的に映画技術家協会 SMPE (ソサエティ・オブ・モーション・ピクチャー・エンジニア) の日本人唯一の正会員に指名された。当然、鈴木はサイレントからトーキー映画への技術革新時代の先駆的な旗手の役目を担い、昭和 11 年 (1936) の日本映画監督協会の主要な設立メンバーとして、一流監督の地歩を固めた。

操夫人やあき子さんは、晩年失意の中で逝った鈴木重吉が、もしこの場にいればと、感慨も一入だった。もちろん操夫人もあき子さんも、この映画を見るのは初めてのことだった。あき子さんは、静寂の中での映写会は息をするのも辛いほどの緊迫した空気に包まれていたと回想した。

若き日の鈴木重吉は、この映画を製作する以前に、ヨーロッパを巡り、マン・レイの『ひとで』やジェルメヌ・デュラックの『貝殻と僧侶』などのフィルムを購入し、わが国に紹介するほどにアヴァンギャルド映画の影響を色濃く受けていた。

スクリーンに浮ぶ、搾取された曲芸団員の演技とカットバックする二十日鼠の回転の表現の中に、その影響がうかがえ、斬新な構図やカメラ・ワークの節々にも鈴木らしさを見て取れた。何よりも若々しく生き生きした感性が画面いっぱいに溢れでていると感じられた。

鈴木重吉は、当時松竹蒲田に所属していた。帝キネへの資金参入によって、城戸四郎の推薦と白井松次郎社長の内命を受けて帝キネ長瀬撮影所に派遣された。東洋一の撮影所で、帝キネ創設以来の被格の予算と最高の技術を結集して『何が彼女をそうさせたか』は製作された。

鈴木は、この映画の後も、新興キネマのトーキー第 1 作となる入江たか子プロの『雁来紅 (かりそめのくちべに)』(撮影：三浦光雄) を監督している。帝キネ、新興キネマにおけるトーキー幕開け時代の斬り込み隊長のような存在だった。

戦時中は、中国に渡り、満映で記録映画の重要性を提唱し、

北京の紫禁城に事務所があった華北電影製作所の設立に尽力、のちにその撮影所長にも就任している。

戦後は、大映東京撮影所の現代劇部に所属したが、日本映画が国際的な評価を得る中で低迷を余儀なくされ、毎日映画社に移籍を決意、次第に劇映画から離れて記録映画の世界へと入って行った。

戦前の映画作家たちの多くが、作品が散逸しているために、正当な評価をされず、その名も忘れられている点から見ても、このようなフィルムの発掘は歴史的な再評価だけでなく、故人たちの名誉の回復にもつながる。

晩年の鈴木重吉は、敗戦による大きな空洞感と自己否定、戦後映画に乗り遅れたという焦りという二重の失意の中にあつた。それだけに生前、この映画が発見されていれば、どれだけ喜んだことだろう。その意味で、操夫人やあき子さんには、また別の感慨があつたのだ。

作品の散逸によって、その人の業績や評価が変わる点では、撮影を担当した塚越成治も同様で、この『何が彼女をそうさせたか』の撮影技術については再評価されて良い。特に、後半部、雨の日の新太郎との再会の場面から出奔、一時の幸福な同棲生活、そして心中の決断、夜間の海上での捜索場面へと続く画面展開とローキーの撮影は、まさに圧巻であり、その技術の高さはサイレント映画の最盛期の最高のレベルを証明している。

塚越は、この映画ののち、トーキー時代に向けて撮影から録音技師となった。当時の撮影者の多くが新しい技術である録音へ移っていった。これは、光学録音という同じフィルムを扱うという点で撮影機を操作する、よく似た作業を必要としたからだ。

塚越成治は、塚越式トーキーを開発し、片岡千恵蔵プロの録音技師として数多く録音作品を担当している。現存している伊丹万作監督の『気紛れ冠者』や『赤西蠣太』らは、彼の録音担当作品である。戦後は、大映京都撮影所の技術部長となった。

当時の技術の粋を誇った『何が彼女をそうさせたか』に携わったスタッフも、現在誰一人として生存していない。それもまた、この映画のたどった歳月の長さを表わしているとも言える。…

様々な思いを孕み、里帰りの披露上映は、地元大阪でも行

なわれた。同じくマリシェフ所長とドミトリエフ副所長を招き、ロシア領事館での特別試写会だった。

マリシェフ所長の挨拶は「営利目的でない文化的事業なら、どんどん各国と交流して行きたい」と国際交流を強調し、ソツェフ副領事は「この映画は質の高い芸術品だ。この物語の少女の運命は、私自身の人生とも通じるものがある。この映画を一人でも多くの人たちに見せてあげて欲しい」と結んだ。

映画は芸術ではないのか

平成9年（1997年）の第10回東京国際映画祭ニッポン・シネマ・クラシック部門のオープニング特別招待作品として『何が彼女をそうさせたか』の復元版が、ギェンター・A・ブーフヴァルトの指揮で東京都交響楽団メンバーの伴奏で上映され、映画祭は開幕した。

その年のテーマは、「ロシアで発見された日本映画」であり、数本の作品がゴス・フィルモフォンドより貸出され、一時的に里帰りをしていた。

東京国際映画祭でゴス・フィルモフォンドのコレクションを上映できたのには、国際交流基金の派遣で、映画評論家の山根貞男氏や蓮實重彦氏、富田三起子さん、国立フィルム・センターの佐伯知紀氏の数回に渡る調査と尽力によるものだった。

しかし、この調査に先駆けて、山川が私財を注ぎ込み独力でロシアへ渡り、ゴス・フィルモフォンドに先鞭を付けた点でも、『何が彼女をそうさせたか』の里帰りは日本映画史にとって重要な足跡を残したことになる。

のちに、NFC（国立フィルム・センター）のニューズレターで、佐伯氏が明らかにするように、ゴス・フィルモフォンドにある日本映画のコレクションが、先の大戦直後に旧満州から接收したものだけではなく、戦前に何らかの形でロシアに渡り一般に公開されたもの、そして、戦後に日ソ交流によって交換された映画もあることが分かってきた⁶⁾。

映画『何が彼女をそうさせたか』がロシア語に翻訳された字幕であった点で、一時里帰りした「旧満映のフィルム」とは明らかに一線を画することが証明できる。

この点については、山川がロシアに渡り、譲渡された段階

で明らかになっていた。

日本での公開当時、傾向映画の傑作として名高い評価を与えたのは、キネマ旬報などの評論家だけではなく、小説家や思想家の中から、この映画に対する絶賛の声が上がっていた。

東京朝日新聞、昭和5年2月9日朝刊には、『何が彼女を…』赤い露国への大きな見出し。

「…藤森成吉氏の戯曲『何が彼女をそうさせたか』が帝キネの鈴木監督によって映画化されプロレタリア映画として問題になっているが、同映画は今回秋田雨雀氏をはじめソビエト系文壇有志の後援によって近くロシアに輸出されることに決定した…」

上記の記事にあるように、この和製プロレタリア映画を社会主義の本場、ソビエト連邦に紹介すべきだという声上がり、映画ジャーナリストの袋一平が、この映画を携えて、単身ソビエトに渡った。当時の新聞には、鈴木も同行すると報道されているが、何らかの理由があったのだろう、鈴木は渡航しなかった。

袋一平の報告によると、『何が彼女をそうさせたか』は、モスクワの人民経済最高会議ホールを皮切りに日本に関する会としては記録破りの大盛会上映となり、また映画監督のブドフキンが「テクニックの点では世界でも一流に値する」と絶賛したと記した。（岐阜日日新聞昭和5年8月6日）

袋一平から鈴木への音信を報じた当時の新聞にも、「…その後、全巻に露文タイトルを挿入して、モスクワ一流の映画館に上映公開したところ、連日数千人の観衆に埋まった。モスクワをはじめ各都市に上映され、至るところ好成绩で、今や全露に於いて『何が彼女をそうさせたか』は異常なセンセーションを起し日本映画の声価を高めている」（大阪時事新聞、昭和5年6月20日）と伝えている。

山川が持ち帰ったフィルムが、ロシア語字幕で、中国からの返還要求が噂されている旧満映のものでないことも、山川への譲渡を容易にした理由になっていた。

来日したマリシェフ所長が「…ロシアの映画研究所などに残っていた四本のフィルムの断片を集めたもの」と語ったことが証明するように、今回里帰りしたフィルムは、袋一平によってソビエトに渡り、全連邦で公開されたものであることに、ほぼ間違いはない。

山川は、大阪のロシア領事館での挨拶の中で、復元して一般の人たちに公開することを約束した。

しかし、そのフィルムはロシア語字幕のままであり、冒頭とラストの重要な箇所がないことは致命的であった。何より復元には多大な資金が必要であることも分かってきた。また、公開するには、活弁か音楽伴奏も用意する必要もある。

祖父の映画と言っても、日本映画の傑作。山川暉雄は、里帰りはさせたものの、これを個人が、私財を投げ出してまで、日本語字幕に復元して、一般に公開する、その意義までは中々見出せなかった。約束が果たせないまま時間だけが過ぎて行った。

今は廃刊となっている「ノーサイド」(1995年9月号「総特集・キネマの美女」)の高津慶子の項で、「…先日、傾向物の傑作『何が彼女をそうさせたか』がロシアで見つかった。とうにプリントが無いとあきらめていたのに、この朗報。高津慶子嬢の若き日を拝めるぞ……と思ったら、いっかな上映されぬ。著作権者たる“資本家”側の都合で、どう公開したら儲かるか検討中との流言ありと聞く」とまで書かれた。

文筆で生計を立てている者なら、事実関係を調査して書くのが常識、調べもせず軽薄な流言を流すなど文筆家の資格なしと、私は憤慨したが、山川は一笑に付した。

「一端実業家であるだけに…、社員には一銭も無駄をするなと営利を追求させながら、社長の道楽と言われかねない浪費はできない…」

山川は、次第に『何が彼女をそうさせたか』を持って余すようになつて行った。

京都の文化博物館に出向いたが予算が組めないと断られ、東京の国立フィルム・センターへ行って復元を依頼したが、民間のものに公的な資金を運用できないと断られた。では、買い上げて貰おうかとも考えたが、あれほど苦勞して持ち帰った《日本映画の傑作》も、ポルノ映画やアマチュア映画も同じ、メートル幾らの費用でしか買い取れないと聞かされた。

「絵画や美術品は作品として評価される。それなのに映画は芸術ではないのか！」

山川は、意地でも『何が彼女をそうさせたか』を復元しようと決意した。

註

- (1) 「日本現代史体系《映画史》」岩崎昶、東洋経済新報社、1961. 1. 20 発行、P. 53-54
- (2) 「帝国キネマの興亡 (一)」森杉夫、「東大阪市史紀要」第 12 号 1988. 3. 31 発行、P. 1-12
「同 (二) 大正末期の帝国キネマ」北崎豊二、「東大阪市史紀要」第 13 号、1993. 1. 30 発行、「実録日本映画史・帝キネ伝」佐々木勘一郎、近代文芸社、1996. 5. 20 発行。
- ※ 山川暉雄は、日本ヘラルドと共同出費のパラダイス・シネマの経営から 2000 年 3 月末をもって撤退。すでに前年、映画興行を停止している第七芸術劇場(本社ビル内)は現在のところ貸出業務だけを行なっている。
- (3) 「戦後 50 年 映画 100 年」(シナリオ『日本映画の百年』)大島渚、風媒社、1995. 12. 29 発行。
- (4) 「特別企画：発見された幻の傑作「何が彼女をそうさせたか」対談：大島渚×鈴木晰也」キネマ旬報 94. 6 月上旬号 No. 1133、P. 106-112。
- (5) 「特別レポート・失われた日本映画をもとめて in Russia : ゴスフィルモフォンドの日本映画」佐伯知紀、NFC ニューズレター第 11 号、1997. 1-2 月号 P. 3-6。「調査報告：ゴスフィルモフォンド所蔵の日本映画リスト (1) 劇映画」同、第 20 号、1998. 7-8 月号、P. 10-11。「同 (2) 文化・記録・ニュース映画」同、第 22 号、1998. 11-12 月号、P. 10-11。